第 11 回

アクサ ユネスコ協会 減災教育プログラム

教員研修会(9/19(木)～9/21(土) 宮城県仙台市・気仙沼市) 開催報告

【主　催】公益社団法人　日本ユネスコ協会連盟
【協　力】アクサ生命保険株式会社、奈良教育大学 ESD・SDGs センター
【後　援】文部科学省、日本ユネスコ国内委員会
【ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ・講師】及川　幸彦氏(奈良教育大学 ESD・SDGs センター　副センター長・准教授)
【講　師・ﾌｧｼﾘﾃｰﾀｰ】上田　和孝氏(新潟大学・新潟大学大学院　准教授)
【研修共催】気仙沼市教育委員会
【研修協力】気仙沼市立階上小学校、気仙沼市立階上中学校、宮城県多賀城高等学校

【3日間の研修プログラム】

(1 日目)	講師/ﾌｧｼﾘﾃｰﾀｰなど
【ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ】『「アクサ　ユネスコ協会　減災教育プログラム」とは？　減災を通じ持続可能な未来を創る「N 助型」減災教育研修プログラム』	及川幸彦氏
【研修 1】講義『東日本大震災の教訓を未来につなぐ－大災害で生きた教育の力－』	及川幸彦氏
【研修2】講義『持続可能な社会の創り手を育てる減災教育～ESD/SDGs の視点からの減災教育の方向性とカリキュラムマネジメント』	及川幸彦氏
【研修3】『被災地区の証言から学ぶ』(階上地区視察：杉ノ下慰霊碑(指定避難場所となっていた高台)	語り部ガイドによる案内
【研修4】視察『気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館(宮城県気仙沼向洋高等学校旧校舎)から学ぶ』震災遺構「気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館」	階上中生徒(館内語り部ガイド) 上田和孝氏(ﾄｰｸｾｯｼｮﾝ)
【振り返り】1 日目の研修振り返り	及川幸彦氏
(2 日目)	
【研修5】講義『防災学習シートの作成と活用について』	熊谷久恵氏(階上小学校)
【研修6】視察『小学校における防災・減災教育の実践』(気仙沼市立階上小学校)	階上小校長、教員、階上中 3 年生
【研修7】視察と対話『中学校における防災・減災教育の実践』(気仙沼市立階上中学校)	階上中校長、教員 及川幸彦氏(ﾌｧｼﾘﾃｰﾀｰ)
【研修8】講義『高校における防災・減災教育の実践』(宮城県多賀城高等学校)	小野敬弘氏(多賀城高校　校長)
【振り返り】2 日目の研修振り返り	上田　和孝氏
(3 日目)	
【研修9 】講話『「311」後の本市教育』	小山淳氏(気仙沼市教育委員会教育長)
【研修 10】講義『防災・減災教育推進のためのネットワーク構築(N助)と実践』	上田和孝氏
【研修 11】ワークショップ『研修成果の共有と今後の実践に向けて』～3 日間の研修のまとめと共有～	上田和孝氏(ﾌｧｼﾘﾃｰﾀｰ)
【総括】研修会総括	及川幸彦氏

◆東日本大震災被災地の教訓・経験から実践を学ぶ◆

今年度助成校 30 校 30 名の教員、ユネスコ協会協働枠で参加の 4 協会から 4 名、計 34 名が参加。宮城県仙台市・気仙沼市にて 3 日間の研修を実施しました。
参加者は専門家や有識者、現場で減災教育を推進している校長や教育長の講義を通して、ESD/SDGs の視点にたった減災教育の理論や方向性を学びました。気仙沼市では、東日本大震災で被災した階上（はしかみ）地区の小・中学校や震災遺構を訪問。授業視察や児童・生徒、先生方との対話を通して、学校と地域が連携した減災教育の好事例を肌で実感しました。

◆減災教育プログラムを通したユース世代の育成◆

昨年に続き、将来教育の道を志す奈良教育大学ユネスコクラブの学生 2 名が参加しました。運営スタッフの一員として会場設営など研修会の運営に携わると同時に、研修生として参加者と一緒に被災地の教育現場を視察。講義やディスカッションにも参加しました。グループディスカッションでは、教員と真剣に意見交換する 2 人の姿が見られました。

◆学校と地域連携の推進～ユネスコ協会協働枠～◆

学校と地域のユネスコ協会が協働して減災教育を推進するために、昨年よりユネスコ協会協働枠を設けました。今回は 4 協会が参加し、教員と一緒に減災教育について考えました。今回の学びを、学校とユネスコ協会や地域との連携に生かすと同時に、学校との連携に悩むユネスコ協会や団体へ発信することが期待されます。

【1 日目】（9 月 19 日　仙台市・気仙沼市）

◆オリエンテーション～研修2（及川幸彦氏（奈良教育大学 ESD・SDGsセンター　副センター長・准教授）による講義）

及川氏による研修ガイダンスと講義が行われました。ガイダンスでは、本プログラムの趣旨や目的について話がありました。講義では、「教育は持続可能な社会の担い手づくりを通して SDGs すべての目標の達成に貢献すること。」「教育はすべての SDGs の実現の鍵であること。その中で、減災教育は SDGs の目標達成につながり、命の教育、あるいは持続可能な社会を築く教育として考えないといけない。」という話がありました。

◆杉ノ下慰霊碑視察

東日本大震災で多くの犠牲者を出した杉ノ下地区の慰霊碑を訪問。実際に慰霊碑の近くで震災を経験した語り部ガイドよりお話がありました。「ここは私の一番の場所だった。もう住めなくなったが思い出だけは消えない。私はたまたま助かったが、たった一度の津波で全部失った。想定外のことってあるんだと実感した。今は命さえあればいいと思っている。皆さんには、いつ想定外の災害がおこるわからない。常に自分事として行動してほしい。そうすればいざという時に減災にもつながると思う。」という言葉が、参加者の心に強く残りました。

◆気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館視察

気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館を訪問。語り部を行っている階上中学校の生徒の案内で館内を視察しました。被災した校舎内は被災時の状況が残されています。左の写真には津波によって校舎 3 階まで流された車が写っています。語り部の中学生は、当時は 1 歳前後で東日本大震災の記憶がありません。学校や地域、語り部の先輩から伝え聞いたことを自分の言葉で話してくれました。その姿は災害を風化させずに伝承していかなければいけないという強い意志を感じました。語り部のひとりは、「これからも覚えてほしい言葉がある。大地がゆれたらすぐ逃げろ、より遠くへ。なぜならこの言葉がたくさんの人を救えるから。」と話してくれました。短い言葉の中にも、命を守るための強いメッセージが込められていました。

館内視察後、伝承館の及川館長はじめ職員の方々とのトークセッションを行い活発な質疑応答が行われました。
学校と地域や施設が連携する課題や方法についての質問に対して、「まずは学校が地域に出て一緒に行動することからはじめると連携が生まれる。一番の壁は先生。先生が地域に顔を出してコミュニケーションを取っていけばよい。」と、助言があり、地域との連携に悩む学校にとって解決の糸口となりました。職員からは、「ここに来た人には命を真剣に考える時間にしてほしい。」「現場を見たからこと、地元に帰って語り部として伝えてほしい。」というメッセージがありました。

【2 日目】（9 月 20 日　気仙沼市）

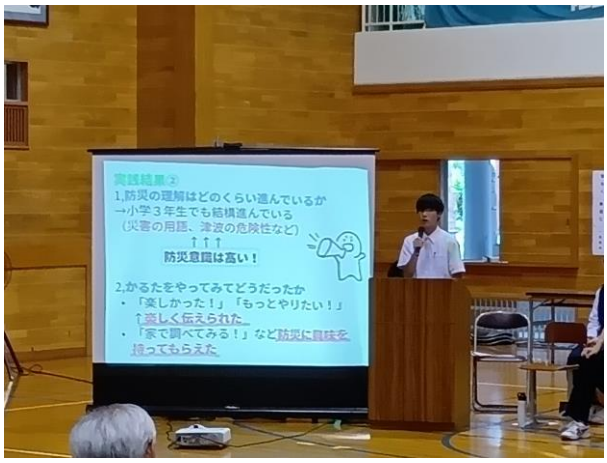
◆熊谷久恵氏（気仙沼市立階上小学校　主幹教諭）による講義

東日本大震災後、気仙沼市教育研究員として作成に携わった防災学習シート（教材）の活用について、熊谷氏により講義が行われました。全体計画、指導計画の例示や実践事例についてなど、参加者が自校で減災教育を実践する際に活用できる内容でした。

◆階上小学校授業視察◆

階上中学校３年生講師による防災教室の授業では、防災かるたや紙芝居、塗り絵、クイズなど小学生の学年に応じた教材を用いて、防災についてわかりやすく指導していました。ICT 機器を活用するなど、年々内容が進化されていて、先輩たちから引き継いだことを改善しながら実践していました。どの授業も、実施して終わりではなく、必ず覚えてほしいことを児童に分かりやすい言葉で振り返る工夫がありました。
その後、体育館に移動して階上小４年生による防災マップの発表がありました。行政、自治会、階上中生徒など地域住民も参加しました。発表後には、参加者から良かった点や改善点などの助言がありました。

◆階上中学校授業視察◆



防災学習をはじめて 20 年になる階上中学校を訪問。生徒（3 年生）の実践発表とディスカッションを行いました。はじめに校長先生より、体験的学習に探究学習を加えて、生徒が主体的に考える場を設けるなど、ESD としての減災教育と位置づけ、持続可能な社会の担い手を育成する能力を育てることを目標としていると話がありました。生徒からは、「災害時に小さい子の余震による恐怖心を和らげるには」、「津波災害について小学生に興味を持ってもらうにはどんな工夫が必要か」などをテーマに発表がありました。ひとりの生徒は観光に興味を持ち、「防災を通して気仙沼に観光客を誘致するには」をテーマに、実際に震災遺構や行政に企画を提案し、SNS 等で発信を目指していると発表しました。その姿と内容に参加者は中学生なのにこれほどのことができるのかと刺激を受けました。ある教員からは、彼らのような生徒が、私たちが育てたい児童・生徒の理想の姿であるという言葉が聞かれました。ディスカッションでも、参加者と堂々と意見交換をする生徒の姿は、周りで見学していた 1・２年生や階上小学校 6 年生にも頼もしく見えたはずであり、生徒（2 年生）からは、来年は自分が頑張ると意欲的な声が聞かれ、階上中学校の防災教育を柱とした人づくりの伝統が垣間見えました。

◆小野敬弘氏（宮城県多賀城高等学校 校長）の講義

小野氏（多賀城高校 校長）より、東日本で唯一災害科学科を設置している多賀城高校の防災・減災、伝災（災害を将来の世代に伝える）学習の講義がありました。
自治体や企業との連携例や国際交流の事例や、ICT をボランティア募集に活用している例など話がありました。
「自校で災害が発生したら、安全確保後、災害の痕跡や被災者の声などを記録に残すことが将来の危機管理・減災教育のために重要で、これ以上の教材はない。」という話は、特に未災地の学校にとっても参考となりました。「避難訓練は生徒のためでなく教員のために行っている。」という話は、教員の意識改革や避難訓練の改善に役立つ話でした

◆2 日目の研修振り返り

階上中学校の櫻井校長、小野寺主幹教諭、多賀城高校の小野校長を迎え、質疑応答形式で 2 日目の研修を振り返りました。
中学生の実践発表について、「説明や表現方法などすばらしかった。先生が生徒を前面に出しているようだが、どうように関わっているのか。」という質問に対し、「小学校からの積み重ねができていて、特に小学生の時に中学生が教え、語ってくれることに憧れがある。先輩の姿を見て自分もそうなりたいという気持ちをもち探究学習に臨み、自身で見つけた答えを発表したい気持ちが強い生徒が多い。その中で、原稿チェックなど先生は助言をするが、生徒が自分の言葉で語ることを重視している。」と話がありました。
初めて減災教育に取り組む際に大切なことは何かという質問に対して、新任や異動してすぐに、学校全体で減災教育に取り組むことは難しい。まずは、自分の担当教科内に減災に関する内容を取り入れていくのがよいと話がありました。新任の先生のみでなく、学校内で減災教育に取り組みたいが悩んでいる先生にとってある助言となりました。
参加したユネスコ協会からは、「地域、学校と一緒に活動したいが連携が難しい。どうすれば連携を築けるか。」と、質問がありました。これに対し、「学校はメリットがあると連携しやすい。ユネスコ協会の思いだけで来られても難しい。学校教育の目標やねらいを考慮していただき、それについてユネスコ協会からはこんな支援ができると提案いただければつながりやすい。お互いにプラスとなる関係を築くことが連携の鍵である。」と、話がありました。学校と連携したい悩みを持つユネスコ協会にとって、参考になる助言でした。

【3 日目】（9 月 21 日　気仙沼市）

◆小山淳氏（気仙沼市教育委員会 教育長）による講話

東日本大震災からの復興の中で、ESD を基本理念とした気仙沼市の復興教育について講話がありました。
東日本大震災の経験に基づき、「①自らの命を守る②地域防災力を高める③震災を学び伝承する④探究的な防災学習の 4 つを掲げ、主体的な行動をとれる児童生徒を育むことを目指している。」という話は小山氏の「命を守る防災学習」に対する熱意を感じました。また、「震災から 13 年半経過して、小中学生のほとんどが震災を直接経験していない時代となるが、教育には先輩から後輩へ受け継がれる伝統の力がある。さらに、震災から立ち上がった大人の力もある。この 2 つを結びつけながら復興に向けた教育、持続可能な未来を創る教育にまい進したい。」と決意の言葉を述べられました。リーダーの熱意があってこそ気仙沼市の防災教育があることが実感をもって伝えられました。

◆上田和孝氏による講義

学校と地域の連携における NPO/NGO の役割や、ネットワークの構築が講義の中心となりました。「減災教育のカギは、学校と地域のつながり。その中で、NPO/NGO の役割は両者をつなげる支援をすること。NPO/NGO や地域と連携したい学校はオープンマインドでアクションを起こしてほしい。」という話は、地域との連携に悩んでいる学校にとって、参考となりました。
「社会貢献の主な手段はボランティアと寄付。減災の観点では被災地支援の実践的教育といえる。」「寄付教育は寄付先を子どもたちが決めることにより社会参加への行動変容を促す。NPO/NGO の災害対応活動について知り、寄付の選択について考えることを通して災害対応や社会貢献について理解を深める。」という話は、減災教育について新しい視点を与えてくれました。

◆ワークショップ（3日間の研修のまとめと共有）

3 日間の研修のまとめとして、グループワークを行いました。研修で学んだことや課題を振り返り、今後自校に戻って取り組むことが話し合われました。最後に、全体発表を行い、「地域とのつながりを築くことが大事であること。」。「児童・生徒のみでなく先生や地域住民の当事者意識を高めることが大事であること。」という意見が共有されました。

◆3日間の総括（及川幸彦氏）

研修の最後に、及川氏による 3 日間の総括がありました。減災教育で育む能力・態度と学習指導要領で育成すべき資質・能力は整合する。学習指導要領にある持続可能な社会の創り手を育てるには、減災教育は重要かつ効果が期待できるアプローチのひとつであるというメッセージとともに、減災教育カリキュラム開発の視点やアプローチについて、最後にまとめとして触れられました。
参加者は、本研修会での学びやつながりを持ち帰り、自校や地域での取り組みを進めていきます。

【参加者（教員）の声】

◆大変学びの多い 3 日間だった。すべての出会いが防災の考え方に新たな視点を与えてくれた。

◆災害を自分事として捉えることの重要性を実感し、それを実践している気仙沼の児童・生徒の姿を見て、素晴らしいと感じた。

◆今回参加して、防災・減災への熱量が格段に上がった。自校に戻っても熱量を失わずに取り組みたい。

◆この研修会でつながった他県の学校とオンラインで児童同士が交流することとなった。このようなつながりができることは本当にありがたい。

◆自校に持ち帰り、実践してみたいことがたくさんできた。継続する中でブラッシュアップしていくことが大切であることを学んだ。

◆地域社会との協働、貢献を目標として防災・減災に取り組んでいたが、さらにN助の視点から多角的、重層的な地域連携を目指したい。

◆本物を実際の目で見て学ぶことの意義を感じた。サポート面でもすばらしく安心して研修を受けられ、通常の 3 日間では得られない経験となった。

し、意識を高めて全校をあげて減災に取り組みたい。

【参加者（ユネスコ協会会員）の声】

◆現在の課題を、協働枠で参加しているユネスコ協会や学校とグループワークなどを通して話すことができて有益であった。

◆語り部として伝えていくことは大切である。私もユネスコ協会で今回の学びを伝えたい。

【参加者（教員を目指す学生スタッフ）の声】

◆防災・減災を軸とした ESD の実践によって子どもたちが生きていくうえで重要な資質能力を育むことができることを体験的に学んだ。将来教員になった際、実践していきたいという思いがより強くなった。

◆現在実習中の学校において、今回学んだことを取り入れた授業やワークショップを実践したい。防災・減災教育で重要なのは「リアル」や「本物」との出会いであると実感した。

第 11 回 「アクサ ユネスコ協会 減災教育プログラム」教員研修会参加校（30 校）・ユネスコ協会（4 協会）一覧

1	小	北海道	釧路市立青葉小学校
2	小	北海道	豊浦町立豊浦小学校
3	高	岩手県	岩手県立岩泉高等学校
4	小	岩手県	紫波町立日詰小学校
5	高	福島県	福島県立福島高等学校
6	中	福島県	福島市立松陵中学校
7	中	群馬県	藤岡市立小野中学校
8	ユ協	群馬県	藤岡地方ユネスコ協会
9	小	埼玉県	ときがわ町立明覚小学校
10	中	東京都	江戸川区立清新第二中学校
11	小	神奈川県	逗子市立池子小学校
12	中	新潟県	新潟市立内野中学校
13	小	長野県	豊丘村立豊丘北小学校
14	ユ協	長野県	飯田ユネスコ協会
15	小	岐阜県	大垣市立興文小学校
16	ユ協	岐阜県	岐阜県ユネスコ協会
17	小	静岡県	静岡市立大谷小学校
18	特支	京都府	京都府立南山城支援学校
19	特支	京都府	京都府立丹波支援学校
20	小	大阪府	アサンプション国際小学校
21	ユ協	大阪府	箕面ユネスコ協会
22	中	兵庫県	南あわじ市立沼島中学校
23	小	岡山県	倉敷市立薗小学校
24	小中	岡山県	美咲町立柵原学園
25	中	岡山県	新見市立新見南中学校
26	小	広島県	呉市立昭和北小学校
27	中	広島県	呉市立広南中学校
28	高	山口県	高水高等学校
29	高	香川県	坂出第一高等学校
30	小	愛媛県	東温市立拝志小学校
31	小中	佐賀県	玄海みらい学園
32	高	熊本県	熊本県立熊本農業高等学校
33	高	鹿児島県	鹿児島県立串木野高等学校
34	小中	沖縄県	竹富町立竹富小中学校